

## 温かいまなざし

常岡 晃

その大半がキリスト者でないわが国の西洋文学研究者が、意識的にせよ無意識的にせよ、避けて通りたいのが、キリスト教が絡む作品や作家研究であつて、非キリスト者の私自身も例外ではなかつた。いや、私よりも数倍も偉い大先生でも、演習中にキリスト教に関する個所に遭遇し、熱心な学生から質問を受けて、「いやー、キリスト教のことは僕にはよく分らないんでね」と答えられると、一同なんとなく納得し、そこで質疑応答は終るのが常であつた。現に、本書で精緻な考察がなされている『田園交響楽』の演習を私が受けたのは、六十余年も前の、ジッドがまだ健在の頃であつたが、彼の聖書の自由解釈に教室中が散々振り廻されて、「ジッドは、一体何を言いたいのかねえ」と苦笑いと共に眩かれた恩師の顔を今

でもなつかしく思い出す。

聖書との関わりを探りつつ、ジッドとサン＝テクジュペリの文学を真摯に考察した本書は、このようなわが国の研究風土に、ひとつの風穴を開けてくれるものと信じている。

本書を注意深く読んで行けば、中世以降、西洋文明のバックボーンとなつたキリスト教精神は、機械文明の波に押しされて著しく衰弱しているように見えるが、それは、実は西洋圏の人達の体内深く伏流水となつて沈潜しており、時として体外に溢れ出て、作家自身も気付かぬまゝ、刻印を残して行くものだ、ということがよく分る。そしてその刻印とは、ジッドやサン＝テクジュペリの場合、彼等のキリスト教的遺伝子と、その枠をも乗り越えようとする旺盛な、或は奔放な作家

の詩魂とのせめぎ合いが刻みあげた一個のアマルガムとは言えないだろうか。著者は、これに聖書という鏡を通して四方から光を当て、彼等の詩魂のマグマが、その格闘の中で勢い余つてキリスト教の教義から逸脱したと思われる條痕をも丹念に洗い出し、考察を加えようとする。これは聖書を精読した者にのみ許される作業であるが、しかしこれは弾効の書ではない。そしてこれこそが、本書の際立つた特色をなしていると思われる。

たとえば、著者はカトリック教会諷刺の書『法王庁の技六』と聖書自由解釈の書『田園交響楽』の類似性を論じた後、シャルル・ムレールの数々のジッド批判に対して次のように反問している。

（しかし、自由に聖書を解釈することによって、そこから糧を汲み取ること、ジッドが優れた文学作品を生み出したことに意味があるのではないだろうか。また、ジッドが常に真摯に聖書に対し続けたことも評価に値する。結果的に、ジッドが神を信仰する道から逸脱することになったとしても、聖書に対する誠実な彼の態度が、反面教師という意味ではなく、信仰者の文学よりも、読者に聖書を読むように促し、イエス・キリストへの信仰へと導くということもあり得るのである。）

このような著者の温かいまなざしには、苦悩に満ちたジッドの格闘の痕跡を、聖書に照らして焙り出す作業の中で、聖書を精読し、著者自身が真正のキリスト者の境地に近付いている気配さえ、私には感じられる。

そして、このような著者のまなざしは、ジッドの「無償の行為」とカミュの「不条理」との関連について考察した、そのカミュの上にも注がれているようである。著者は、いわゆるカミュの不条理における「神の否定」がいかなるものかを次のように解釈している。

（カミュにとって、不条理は神の否定であった。ただ彼は、キリスト教の教義の核心をなす、イエス・キリストの死を「贖罪」とする考え方、「復活」を否定するが、イエス・キリストは肯定している。カミュは「カルネー」において、「福音書から最後の数ページをもぎ取つてしまおう。そうすれば、人間の宗教が、孤独と偉大なものに対する崇拜が、我々に提示される。」と書いている。最後の数ページとは、おそらく「復活」の記述を意味しているのであろう。カミュは、イエス・キリストを「完璧な人間」と見なしているのである。これは、アフリカ旅行以後、教会はキリストの教えを受け継い

でないとするジッドに通じる姿勢である。)

サン＝テクジュペリの考察においても、このような著者の視線は一貫している。著者は、『南方郵便機』『夜間飛行』等の初期作品から、『人間の土地』『戦う操縦士』へと、極限状態を体験する中で、彼の幼児期のキリスト教的体験から、次第に「人間の本質的なところで宗教性が浸み出してくる」その過程を丹念に追っている。しかしながら、その宗教性が最も高揚したと思われる後期の『戦う操縦士』でも、「キリスト教の諸価値をキリスト教そのものから受けとれず」、「ヒューマニズム」に求めている」ことも押えている。

最後に、サン＝テクジュペリの遺書とも言うべき、彼が彼独自の神の国の建設をめざした未完の大作『城砦』においても、キリスト教の教義から逸脱した数々の事例を挙げて、この王国の異教性を論証しながらも、著者は、サン＝テクジュペリへのいたわりに近い共感をこめて、次のように締めくくっている。

（サン＝テクジュペリは、現代の機械文明では生きづら自分を意識していた。ところが皮肉なことに、その機械文明が生み出した飛行機に、活路を見いだすことができたのだ。飛行機によって、機械文明から遠く離れた砂漠に身を置

くことができ、自分の生きる道を探求した。また、聖書が持つ超自然、非科学性のために、イエス・キリストへの信仰も、パウロが説く教義への共感も語ることはない。それでも彼の超自然性への志向は捨てられてはいない。城砦の建設の基盤である「犠牲」は、イエス・キリストの「受難」と通底していると考えられるし、パウロが指し示すところと全く無縁というわけでもない。反信仰の言説にもかかわらず、創造主とイエス・キリストへの思いが、彼の生を支えた。)

冷厳な聖書学者のそれよりも、私はむしろ、謙虚な著者の温かい息づかいが聞える、この一篇を選びたい。(熊本大学名誉教授)